

中部地方域の方言についての方言地理学的研究 (II)

—「海へ行こう(勧誘表現)」の分布とその考察—

江 端 義 夫
(1977年9月20日受理)

〇はじめに

1. 目 的

中部地方域に行われている方言生活のうち、勧誘表現「山へ行かないで、海へ行こう。」について、諸事象分布の実態を明らかにし、かつ、その分布相について考察するのが、本稿の目的である。

2. 研究 史

当該域方言についての、本事項に関する本格的な研究は、今日まで、見るべきものがほとんどない。しかし、中部地方域の方言における勧誘のもの言いは、以前から注目されていたようである。東条操氏は、「日本方言学」(吉川弘文館 1954 47頁)で、つぎのように述べていられる。

この東海東山方言では、名古屋を中心とするオキャーセ言葉は、終助詞ナモと共によく知られている。これは名古屋の下町に発生したもので、分布の狭い方言である。そんなこと有ラスカの反語形式、行コマイ(カ)の勧誘形式、サ変動詞の下一段化「セル」などは、これに比べると使用区域が広い。

この記述は、概説である。勧誘表現形式の実相を説明したものになっていない。また、中部地方域でのその分布については、「使用区域が広い」とあるばかりである。

では、「行コマイ(カ)」などの勧誘表現諸事象が中部地方域で、具体的に、どのような歴史的現実相を示していようか。私は、如上の点についての考察に従いたい。

3. 調査資料、調査期間

本稿で使用する調査資料は、3種類にわたる。一つは、1976年3月から10月まで、私が中部地方9県域の臨地調査に従い、質問調査によって得た資料に基づいて作製した方言地図である。もう一つは、1966年から1968年まで、私が愛知県域について、上記のと

同様の調査に従い、作製した方言地図である。他の一つは、1963年から1976年までの間に、中部地方域の諸地に臨地調査して、自然会話を聴録したものである。

4. 資料提供者(被調査者)

方言地理学的調査において、私は、以下の条件にあう人に、方言資料の提供をお願いした。原則として、老年層者は、60才台の土地生えつきの女性一名、少年層者は、中学2年生の女子二名で、土地生まれ土地育ちであり、両親のうち少くとも一方が土地っ子であることを条件とした。ただし、1976年の中部地方域の調査においては、少年層者は一名であった。また、方言資料の時間的斉一性を主眼におき、短期間調査を試みたため、調査時間が少年者の学校生活時と重なる際には、私は他の調査地点へ移動した。ために、老年層の全調査地点数は167であるが、少年層のそれは36にとどまった。本稿では、少年層図(中部地方域、1976年調査)については言及しないこととする。

5. 「海へ行こう(勧誘表現)」諸事象の分類

中部地方域で注目される勧誘表現諸事象を分類すれば、それらは、以下のように三つに分類される。

①「イカマイ」「イコマイ」「イクマイ」類事象
②「イカズ」「イカザー」「イクヤショー」「イガンショー」「イクマショー」「イクペー」「エベ」「イカッ」

③共通語的諸事象および個別事象

以下の考察では、①に重点を置いて考察し、ついで、②および③をとりあげることにする。

I 「イカマイ」「イコマイ」「イクマイ」類事象の分布とその考察

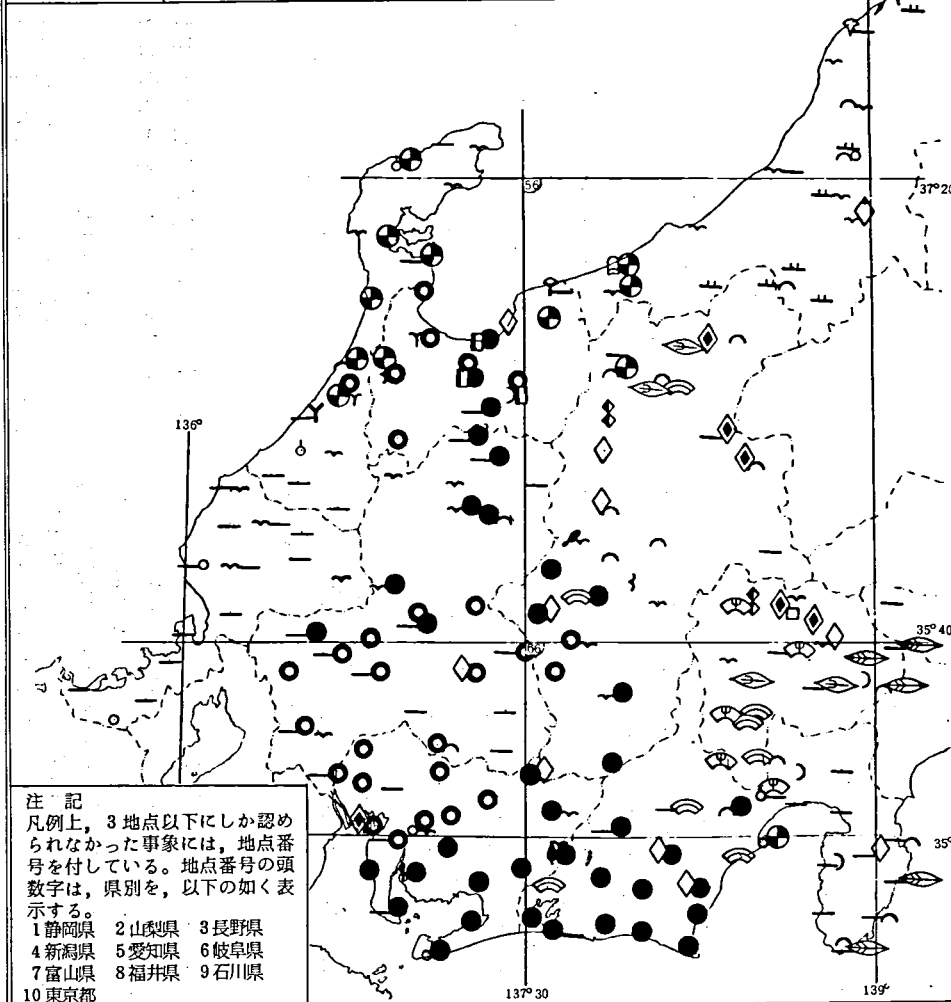
1. 「～マイ」の出自

「イカマイ」「イコマイ」「イクマイ」に共通するのが、「～マイ」である。「マイ」は、古語の願望の

図 1

海へ行こう (勧誘表現) <老>

「山へ行かないで、海へ行こう。」
と人を誘う言いかたは、どう言いますか。



注記
凡例上、3地点以下にしか認められなかった事象には、地点番号を付している。地点番号の頭数字は、県別を、以下の如く表示する。
1 静岡県 2 山梨県 3 長野県
4 新潟県 5 愛知県 6 岐阜県
7 富山県 8 福井県 9 石川県
10 東京都

- イカマイ
[ikamai]
<イカマイ>
<イカメ>
(イガメ 330)
- イコマイ
[ikomai]
<イコマイ>
<イッチ コマイ>
[イコマ 608
イッチ コマー 706 709
イッチ コンマイ 703]
- イクマイ
[ikumai]
(イクメ 909)
- イカズ
[ikazu]
<イカズ>
[イカズ 208 326
イッチ コーズ 213]
- イカザ
[ikaza:]
- イキヤシヨ
[ikijasyo]
(イキヤサン 523)
- イガンシヨ
[iganjyo]
404
- イキマシヨ
[ikimasyo]
(イキマシヨ 319)
- イクベ
[ikube]
エベ 210 309 314
[ebe]
(ヤベ 205)
- イカッ
[ikas]
215 321
- イコ
[ikot]
<イコ>
<イッチ コ>
<イッチ コ>
- イゴ
[igot]
<イゴ>
(ユゴ 410)

- ※※※※※
- イクカ 518 812 814
[ikuka]
[イク カ 113 515
イク カイ 112
イグ カ 405]
- イッカ 909 916
[ikza]
- イカナイカ
[ikanaika]
<イカネ カイ>
[イカナッー カイ 606
イケネッー カ 103
イカネー カ 201 913
イカネ ケ 818
イガネ カイ 302 405
イキヤヘン カ 608
イガンネー カイ 406]
- イカナイ
[ikanai]
イカンガ
[ikanjka]
<イガンカ>
<イカンケ>
[イガンケ 407
イカン カン 502 503
イカシン カ 901
イカヘン カナ 623
イッチ コンカ 801]
- イカン
[ikan]
[ikan] 817 712
イカンカカ 912
(イカンカケ 709)
- イカレツカ 706 707
[ikarekta]
(イッチ コラレン 703)
- イカシヤランカ 702
[ikasyaranka]
イクマシヤンカ 917
[ikumasyanka]
イキナランカ 418
[ikinaranjka]
(イキナルマイカ 418)
- オイキルカン 502
[oikirukato]
(オイキンカン 502)
- イッチャー 212
[itjasa]
イクヤ 327
[ikejasa]
イッタホーガ イーロー 408
[itahogaitro]
オイデヤ 517
[oideja]

助動詞「まし」に通ずるものであろう。古語の「まし」は、動詞、形容詞、形容動詞の未然形に添加するが、中部地方の「マイ」は、動詞にしか添加しない。『日本文法講座』6（明治書院、1970）によれば、「まし」は、中古から中世までのものと記してある。鎌倉時代以後に、京都で衰えたとされる「まし」が、形と用法とを変えて、今日の中部地方に、根強い分布を示しているのが注目される。

2. 「イカマイ」について

「イカマイ」には、単独で勧誘表現を形成するばあいと、文末詞「カ」が添加して、「イカマイ カ」として行われるばあいとがある。後者のばあいの方が、圧倒的に多い。

図1（中部地方域老年層）において、「イカマイ」には、中部地方域で三つの変相が認められる。一つは /ai / 連母音が同化を起して、「イカメー」となったものである。これは、

岐阜県高山市大新町、岐阜県吉城郡神岡町東雲、
富山県富山市黒崎、富山県富山市森

で聞かれた。二つは、/ai / 連母音の相互同化の認められる地域で、「イカマー」となったものである。これは、

長野県下伊那郡天竜村平岡、愛知県岡崎市明大寺町、
愛知県碧南市音羽町、岐阜県吉城郡宮川村杉原

で聞かれた。三つは、「イガメ（ガー）」である。これは、

長野県木曾郡開田村把ノ沢

にある。把ノ沢では、東京語の /k / にあたる所に、語頭以外の場所で、有声破裂音 [g] が表われるのが特色である。

「イカマイ」など、動詞の未然形に「マイ」が添加して勧誘表現を行う生活は、中部地方域で、つぎのように聞かれる。

- モテッテ ミツマイ カ。もらってみようよ。(中女→中女) 愛知県額田郡赤羽根町 1965
- ヅクシ トリニ イカマイ テウ。上筆をほりに行こうと言う。(老女→筆者) 愛知県額田郡田原町 1965
- エー コメ タベマイ カヤ ユーグ。良質の米を食べようと言うんだ。(老女→筆者) 愛知県額田郡額田町福江 1965
- シンシューニ イカマイ カ。信州へ行こうよ。(老女) 長野県木曾郡横川村字賢川 1974
- 二人で サゲテ イカマイ カ。二人でさげて行こうよ。(中男→筆者) 岐阜県郡上郡高鷲村 1972
- 今の子は ツッテ イカマイ カ。(サゲルことを) 今の若い子は、ツッテ イカマイ カと言う。(中男→筆者) 岐阜県郡上郡高鷲村 1972

さて、図1によれば、これら「イカマイ」類諸事象は、中部地方の5県（静岡県、愛知県、長野県、岐阜県、富山県）に、顕著な分布を見せている。

3. 「イコマイ」について

「イコマイ」は、「イカマイ」と同様に、文末詞「カ」が添加して、「イコマイ カ」として行われることが多い。

「イコマイ」には、五つの変相がある。その一つは、「イコメー」である。これは、以下のように、/ai / 連母音の相互同化の著しい愛知県、岐阜県下で聞かれた。

愛知県海部郡美和町木田、愛知県一宮市今伊勢町馬寄、
岐阜県山県郡美山町岩佐、岐阜県武儀郡坂取村上ヶ瀬、
岐阜県海津郡南濃町駒野

二つは、「イコマー カ」である。これは、/ai / 連母音が [a:] となる多治見市、瀬戸市とその周辺域との特色を示している。

岐阜県多治見市広小路

三つは、接続助詞「テ」を介した「イッテ コマイ」である。これは、

岐阜県武儀郡坂取村上ヶ瀬、富山県永見市中田、
富山県小矢部市末友、石川県金沢市寺町

に聞かれた。四つに、「イッテ コマー」がある。これは、

富山県富山市黒崎、富山県高岡市長慶寺

に聞かれた。五つに、「イッテ コンマイ」がある。富山県上新川郡大山町相田

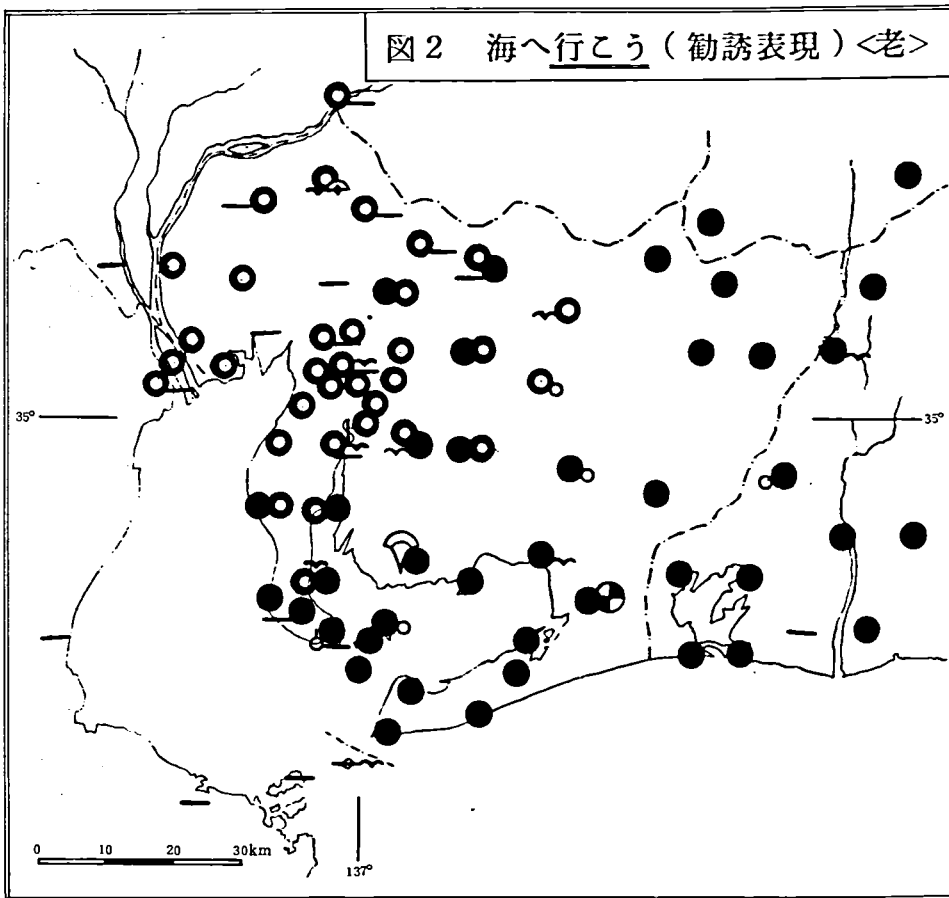
さて、図1によれば、「イコマイ」類諸事象は、美濃と尾張北部域とに、色濃い強力な分布がたどられる。信州では、木曾路の入口にこれが分布しているが、飛騨にはこれがない。富山県全域にこれがあり、石川県の一地にも、これがある。

中部地方9県域のうち、福井県、静岡県、山梨県、新潟県には、「イコマイ」類諸事象の分布がない。また、福井県、山梨県、新潟県には、「イカマイ」と「イコマイ」とが分布していない。

動詞の志向形に「マイ」が添加して、「イコマイ」に類する勧誘表現を行う生活は、中部地方域で、つぎのように聞かれる。

- イコ。ハシッテ コマイ カ。行こう。走って行こうよ。(小学生男子同志) 愛知県知多市南柏谷 1965
- コノ イキニ イッテ コマイ。(朝方の涼しい)この折に、行ってこようよ。(初老女→幼女) 愛知県知多市南柏谷 1970
- イーニ シテ オコメー カ。労働交換しておこうよ。(老男→筆者) 長野県木曾郡横川村字賢川 1974

図2 海へ行こう (勧誘表現) <老>



イカマイ
[ikamai]
<イカメ>
[イカメ-501]
イカメ 318

イコマイ
[ikomai]
<イコメ>
<イコミ>
[イコミ-302]
アスンデコマイ
105
イコメ- 314

イクマイ 338
[ikumai]

イカー 323
[ikaz]

イコー
[ikor]
<イコ>

※※※※※

イク カネ 331 403
[ikukane]
[イク カン 330]
[イク カノ- 322]

イッカー 318
[ikaz]

イカン カ 101 311s
[ikanka] 408

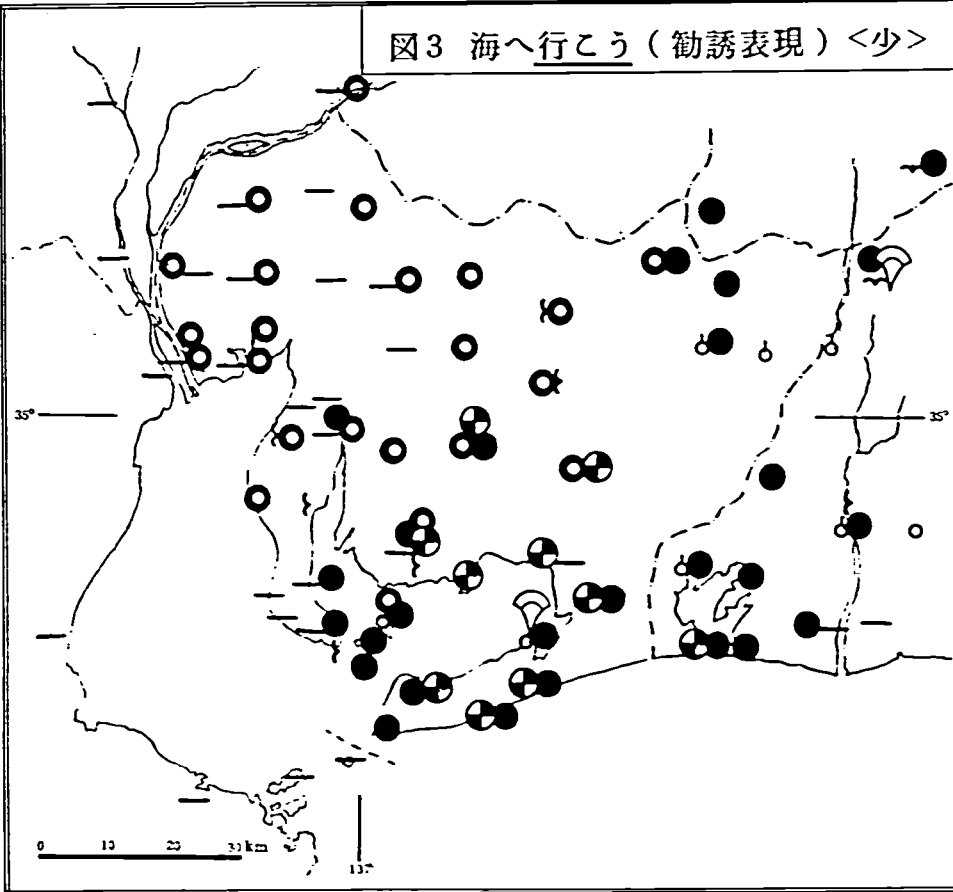
[イカン カー 314]
イカン カン 316 324
イカン カイヤ 332
イクヤ-セン カン 330
イクヤ-セン カヤ-
307

デカケヤ- カー 307
[dekakeja:ka:]

オイジャー 314₁
[oisaz]

注記
凡例上、3地点以下にしか認められなかった事象には、地点番号を付している。
地点番号の頭数字は、県別を以下の如く表示する
1 三重県 2 岐阜県
3 愛知県 4 静岡県
5 長野県

図3 海へ行こう (勧誘表現) <少>



イカマイ
[ikamai]
[イカメ 318]
[イカメー 406]

イコマイ
[ikomai]
(イコマイター 305
306)

イクマイ
[ikumai]

イカー 339
[ikaz]
(イカ 409)

イコー
[iko:]
<イコ>
(イコー 303)

イッカ
[ikuka]
(イッカー 339)

イッカー 336 402
[ikaz]
(イッカ 335
407)

イカンカ 409 501
[ikanka]

イカン 407
[ikan]
イカヘン 312 319
イカヒン 319
イキャヘン 314
331
イキャーヘン 323
イケヘン 332

注 記
凡例上, 3 地点以下にしか認められなかった事象には, 地点番号を付している。
地点番号の頭数字は, 県別を以下の如く表示する
1 三重県 2 岐阜県
3 愛知県 4 静岡県
5 長野県

4. 「イクマイ」について

「イクマイ」もまた、文末詞「カ」が添加して、「イクマイ カ」として行われることが多い。

「イクマイ」には、他に一つの変相がある。それは「イクマー」である。

石川県輪島市河井新田町

動詞の終止形に「マイ」が添加して、「イクマイ」に類する勧誘表現を行う生活は、中部地方域で、つぎのように聞かれる。

○オクマイ カ。やめておこうよ。(老女) 富山県下新川郡
宇奈月町音沢 1974

さて、図1によれば、「イクマイ」類諸事象の分布は、太平洋側では、静岡県清水市三保の一地に見られるだけである。日本海側では、石川県、富山県、新潟県西部、長野県北部に、その分布が認められる。それらの中でも、中心的な分布域は、石川県であろう。

5. 愛知県域における
- ① 「イクマイ」>「イコマイ」
 - ② 「イカマイ」>「イクマイ」
- ① 「イコマイ」は「イカマイ」よりも新しい
(「イカマイ」>「イコマイ」)

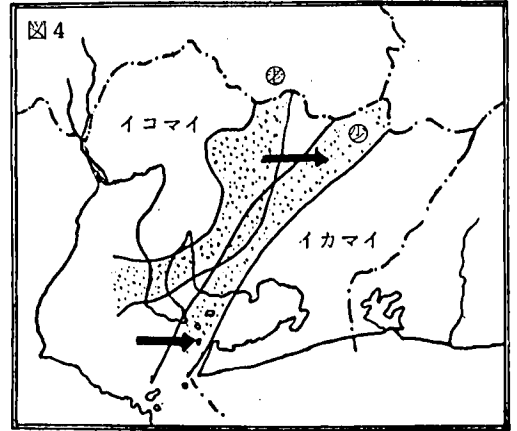
図2(愛知県域老年層)では、愛知県の尾張に、「イコマイ」事象が色濃く分布している。三河以東に、「イカマイ」事象が強力に分布している。そして、尾張と三河とが接する地域に、両事象の併存が認められる。併存ゾーンの中心は、西三河、知多半島である。木曾川の西の三重県側では、共通語的な「イコー」類諸事象が分布する。

図3(愛知県域少年層)でも、図2のと同様に、尾張中心の「イコマイ」と、三河中心の「イカマイ」との分布が対立している。しかし、尾張でとくに、共通語的な「イコー」事象の分布がふえている。総じて、少年層では、老年層に比して、「イカマイ」「イコマイ」の分布量が減っている。

図2と図3とを比較して、もっとも大切な点は、「イカマイ」と「イコマイ」との併存ゾーンが、少年層において、老年層のよりも東方に移行し、「イコマイ」の分布域が拡大しているという点である。図4はそれを図示したものである。

したがって、「イコマイ」の分布が東方へ伸展し、「イカマイ」の分布が後退したのである。

ところが、尾張の「イコマイ」は、東の三河へ分布をのぼしてはいるものの、共通語「イコー」の分布拡大の勢いをしのぐほどではない。また、三河に根強い「イカマイ」の分布に、「イコマイ」が、ことごとくとってかわるほどの強大な浸潤力を持っているものではなかった。「イコマイ」が「イカマイ」よりも新勢



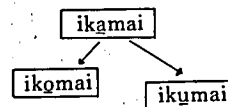
力の事象だからといって、少年層にすぐにも受容されるものではないことを、図3の分布は示している。名古屋から豊橋まで、片道約1時間で、毎日数十本の電車が往復し、多くの人々が交易している。しかしながら、常識的に想像するほどに急速に、方言の保守性はくずれるものではなく、序々にしか改新しえないものであることが知られるのである。

- ② 「イクマイ」は「イカマイ」から派生した。
(「イカマイ」>「イクマイ」)

図2で、豊橋の1地に、「イクマイ」が見える。ところが、図3では、その分布が10地点にもふえている。「イクマイ」が、少年層では、豊橋市を核として、三河湾を抱きかかえるように、渥美半島の方へ、あるいは、東海道域に沿って岡崎市まで、分布を拡大したのである。「イクマイ」は、「イコマイ」とは無関係に「イカマイ」の盛んな豊橋市を中心にして生成され、その分布が伸展しつつある。

ところが、一方、「イクマイ」と「イコマイ」との語性の類似から考えて、「イクマイ」は、「イカマイ」>「イコマイ」>「イクマイ」の過程を経て生成されたとする考え方も成り立つ。これは、分布上での解読が困難である。私は、いまは、これについての考察を保留し、後の課題とする。

ここにおいて、「イカマイ」から「イコマイ」、「イクマイ」への推移が看取されるのである。



愛知県域に、 $a > u$ 、 $a > 0$ の奥舌母音化が行われていると言えよう。母音が聞こえの小さくなる方向へ向かう傾向にあることを示している。

ところで、渥美半島の出身で、現在もそこに在住して
いられる杉浦明平氏は、次のような一文を書いてい
られる。

子供たちの遊んでいるのをきくと、「行くまいか」
「遊ぶまいか」としゃべっている。それが標準語
ならば、学校や社会で正確な用法を教えられて、
改めることができるだろう。が、方言は、だれも
文法などないと思っているので、この子供たちが
成長するにつれて、「行かまいか」は一般に「行
くまいか」に席をゆずってしまうのではなからう
か。もちろん、そのころには中性で生活のニュア
ンスを欠く標準語が、いまよりもっとひろがって、
方言的なものは、根絶されないまでも、痕跡のよ
うなものにまで退化してしまうかもしれないが、
わたしは方言でもそれなりに純正さを保たしめた
いとねがっているものだ。よちよち歩きの子足ら
ずの子供が「遊ぶまいか」というのはかわいいけ
れど、声変りのした中学生の「歌うまいか」は、
どうもあまりパッとしない。

(「言語生活」99 筑摩書房 1959)

杉浦氏の危惧されている“パッとしない”状態が、
昨今の中学生の言語状態であることは、図3での「イ
クマイカ」の隆盛が、如実に示している。

そこで、愛知県域での3事象の分布事態を通して帰
納された「イカマイ」>「イコマイ」、「イカマイ」>
「イクマイ」が、中部地方域での分布の考察において
有効かどうかを、つぎに、検討しなくてはならない。

6. 中部地方域における

- ① 「イカマイ」>「イコマイ」
- ② 「イカマイ」>「イクマイ」
- ③ 「イクマイ」>「イコマイ」

① 「イカマイ」>「イコマイ」について

図1によれば、岐阜県や富山県下で、「イカマイ」
と「イコマイ」との併存事態が認められ、両事象の分
布が混ざりあっている。2事象の張りあい関係が看取
される。また、「イコマイ」が、中部地方での都市部
すなわち平野部に分布し、「イカマイ」は、地方部す
なわち山間や沿岸部に分布していがちである。飛騨に
は、「イカマイ」ばかりがある。これらの分布相を凝
視すれば、「イコマイ」が「イカマイ」よりも新しい
ことが、ここでも首肯される。

② 「イカマイ」>「イクマイ」について

石川県から富山県および新潟県にかけての沿岸部に、
「イクマイ」がある。長野県の1地にも、それがあ
る。静岡県の清水市三保には、ポツンと1地点にのみ、
「イクマイ」がある。そこは、「イカマイ」の分布域
の中の辺境とも言える地域である。

以上の分布相を通して、私は、つぎのように考える。
「イクマイ」が、「イカマイ」の古態性を脱皮し、活
生した新事象であることは、静岡県清水市三保の例で
も知られよう。日本海側の諸県に隆盛な分布を見せる
「イクマイ」は、「イカマイ」から変化して、いま、栄
えているのであろう。太平洋側でも、日本海側でも、
人々は通用の「イカマイ」を、「イクマイ」に変える
言語気質を持ちえたことかと思われる。このように理
解すれば、山間の飛騨地方に、古態の「イカマイ」が
残り、日本海側諸県で、それが「イクマイ」を生み、
石川県や新潟県へそれが伝播したとされよう。

③ 「イクマイ」>「イコマイ」について

上述のように、愛知県、岐阜県、長野県で、「イコ
マイ」が「イカマイ」よりも新しいことが証明された。
日本海側で、「イコマイ」は、おもに、富山県下に分
布し、平野部中心に広く認められる。石川県で、それ
が金沢市に「イクマイ」と併存しているのが認められ
る。「イクマイ」の分布は、大略、能登半島と、富山
県の東西の遠隔飛地と、上越地方とにある。

したがって、「イクマイ」の分布域に、「イコマイ」
が発生し、その分布域を拡大しているものと考えられ
よう。

石川県では、能登半島を中心に、「イカマイ」が、
辺境変移の現象によって、すでに早く「イクマイ」に
転じた。金沢市のように、いち早く「イクマイ」と
「イコマイ」とを共存させているところもあるが、ま
だ、「イクマイ」から「イコマイ」への変化は混んで
いない。石川県での「イクマイ」は、それなりに、安
定した位置を占めている。

以上で、中部地方域における「イカマイ」「イコ
マイ」「イクマイ」諸事象の分布事態についての考察を
終える。愛知県域で帰納された二つの改新傾向は、中
部地方域でも有効であった。

日本語方言上、勧誘表現に、中部地方域方言の特色
を示す「イカマイ」「イコマイ」「イクマイ」諸事象
の、歴史的現実態は、如上のとおりである。

Ⅱ 「イカズ」「イカザー」「イキヤシ」 ー」「イガンシ」ー」「イクペー」 「エベ」「イカッ」の分布とその考察

中部地方域における「イカマイ」「イコマイ」「イ
クマイ」類事象以外の勧誘表現諸事象の中で、主要な
ものについて、以下に少しく、その分布をたどり、考
察を行う。

1. 「イカズ」

「イカズ」は、図1によれば、「イカマイ」「イコマイ」「イクマイ」の主要分布域を出はずれた、東側に分布する。長野県、山梨県、静岡県に、その散在分布がある。未来の言い方の「行かむとす」が、その出自であることは、東条操氏の論考によって明らかである。

2. 「イカザー」

図1によれば、「イカザー」は、山梨県の3地点に、静岡県の2地点に分布する。これは、「イカズ」に文末詞「ワ」が添加して、勧誘の表現を形成したものである。「イカズ」「イカザー」は類同事象であり、長野、山梨、静岡の3県の当該表現を特色づけるものでもある。

3. 「イキヤショー」

「イキヤショー」は、図1で、長野県の北東部、山梨県の北東部に見られる。「ヤス」助動詞の志向形（未来形）を、勧誘表現に用いるのは、長野県の本曾路では稀である。中部地方でも、東よりの地の発想にかかわるものである。愛知県の1地に認められる「イキヤサン」は、尊敬の「ヤス」である。これは、京阪の「ヤス」と同じものである。

○ホンマニ イロマチデ タシネテ オミヤス。
ほんとうに、色町でお尋ねになってごらんなさい。(老女→筆者)京都市中京区 1975

4. 「イガンショー」

新潟の1地にある「イガンショー」は、語中の/k/の濁音化によるもので、「イカンショー」と類同のものである。

5. 「イキマショー」

三河、遠江、信州などには、共通語とは異った「イキマショー」がある。

○オミリマショー。ごらんなさい。(老女→筆者)愛知県
刈谷郡程美町小中山 1967

○ゴメンマショー。ごめんください。(老女→筆者)愛知県
刈谷郡程美町小中山 1967

○ボンサイッテ ミマショー。オイ。盆栽って、見る
でしょ。おい。(老男→中男)長野県本曾郡緒川村字貫川1974

しかし、いま、それとこれとの区別が困難である。図1に見られる「イキマショー」の分布は、共通語的なものとこれとの渾態相である。

6. 「イクペー」

図1で、「イクペー」が、山梨県の東部、東京都、

伊豆半島東部に見られる。「ベシ」助動詞が、その出自であろう。関東地方域に強力な分布を示す「ペー」が、隣接する中部地方域にも、分布の足をのばしているのである。

7. 「エベ」

「エベ」の出自は、「歩め」であろう。図1によれば、長野県北部の上水内郡牟礼村牟礼、上水内郡中条村中条、山梨県西八代郡市川大門町に、「エベ」がある。「エベ」から変化した「ヤベ」が、山梨県南都留郡河口湖町大石にある。かつては、「エベ」などの言い方が、長野県、山梨県にも、かなり広く分布していたのか。

8. 「イカッ」

山梨の1地と長野の1地とに、「イカッ」がある。これは、「イカズ カ」の促音化であろう。中部地方で、起るべくして起った事象である。

9. 「イコー」「イゴー」

「イコー」「イゴー」は、共通語的なものである。中部地方の全域に、まばらな分布を示す。「イゴー」は、新潟県下に主要分布を持つものである。語中の/k/音の濁音化傾向が注目される。

10. その他

図1では、如上以外に、勧誘の心情を、ていねいな質問表現に仕立てた諸種のもの言いが見られる。それらは、各地域での、待遇表現法体系に裏づけられた、特色あるものとなっている。たとえば、富山県域での「イカレッ カ」は、富山県の「レル・ラレル」敬語助動詞の隆盛と、深く結びついている。

III 中仙道域の方言の「勧誘表現」について

中部地方域の方言の分布地図が、面として、その勧誘表現を討究しうるものであるとすれば、中仙道域の方言は、横軸の線として、中部地方域の方言を討究する視点であると言えよう。

以下に、京都から東京までの中仙道域方言における勧誘表現の様態について、記述的研究を行う。京都から東京までの69宿場のうちから、約6宿場めぐりに、調査地点が選ばれた。合計13地点について、質問法を中心とした調査を行った。期間は、1974年から1976年までである。質問文は、「おかあさん、早くごはん

を食べましよう⁵⁾」である。自然傍受調査で得られた当該文例も、記述している。質問文に該当する文例については、以下の例で、共通語訳をしない。

1 <京都>京都市中京区

○カーサン、ゴハン イタダキマシヨ。 <ていねい> 1975

2 <守山宿>滋賀県守山市今宿町

○オカーサン、ゴハン タベマシヨ カー。 <ていねい> 1975

3 <醒ヶ井宿>滋賀県坂田郡米原町

○オカーサン、ハヨー ゴハン タベヨ。 <ふつ> 1975

上記3地点については、勧誘表現として、共通語と同じ表現「～マシヨ」「～ヨ」が聞かれた。

4 <美江寺宿>岐阜県本巣郡巣南町

○オジョクジ デキマシタ ヨ。お食事ができましたよ。(老女→中男) 1975

○ナカナオリ シヨマイカッチ……。仲なおりをしようよって…… (老女) 1975

岐阜県の美江寺では、自然会話の中で、勧誘表現「シヨマイ」が聞かれた。

5 <御嵩宿>岐阜県可見郡御嵩町

○オッカサン、ハヨー ゴハン タベヨマー カ。 <上> 1975

勧誘表現「タベヨマー カ」が注目される。

6 <馬籠宿>長野県木曾郡山田村馬籠

○ハヨ ママ クオマイ カ。 <案内で。下> 1974

馬籠では、「～マイ」の降態が見られる。

7 <木曾福島宿>長野県木曾郡木曾福島町

○オッカサン、ハヤク ゴハンニ セマイ カ。 1975

○オッカサン、ハヤク タベマイ カ。 <ふつ> 1975

8 <鈴川宿>長野県木曾郡柳川村

○ゴミオ セキザライ シメー カ。 <みそ、湯を、沸かすのをしようか。(老男) 1974

9 <洗馬宿>長野県塩尻市洗馬

○カーチャン、ハヤク ゴハンニ シマシヨ。 <上> 1975

塩尻や諏訪に近くなると、勧誘表現「～マイ」は聞かれなくなる。

10 <和田宿>長野県小県郡和田村

○タベナンシ。食べなさい。(老男) 1975
○アスヨエ ヱベ ヤー。あそこへ行こうよ。(老男) 1975

和田峠を越えて、長野県の東部に至れば、関東色の濃い「～ペー」ことばが、中心となる。

11 <高崎宿>群馬県高崎市菊地町

○オカーサン、ハヤク ゴハンニ シマシヨ。

1975

○ヒトツ タベペー カー。 1975

12 <鴻巣宿>埼玉県鴻巣市滝馬室

○オッカチャン、マツマ タベペー。 1975

上述のごとく、群馬でも埼玉でも、「～ペー」が聞かれる。

13 <板橋宿>東京都板橋区

○オカーサン、ゴハンニ シマシヨ。 <同輩へ> 1976
中仙道域では、岐阜県、長野県が、中部地方色豊かな「～マイ」勧誘表現諸事象を見せる。

「～マイ」勧誘表現諸事象は、13地点の記述において、美江寺(岐阜県)から贅川(長野県)まで、たどられた。関ヶ原を越えて西方の醒ヶ井にはこれがない。これらは、注目すべき点であろう。

以上、中部地方域の方言における勧誘表現の実態について考察した。当該域での勧誘表現の動態や用態の研究は、今後、さらに、継続的に考察されるべき価値あるものであると考えられる。

注

1) 馬瀬良雄氏は、「木曾開田村方言の音韻」

(『国語学』34輯, 1958) “ [iganeqa]

(行かまいか — 「行こう」の意 —) ” を採録していられる。

2) 東条操氏“未来助辞「ず」の考”(『方言の研究』刀江書院, 1949)

3) 関東域での「ペー」の分布は、大橋勝男氏著『関東地方方言事象分布地図』第2巻 Map 85, 86に見られる。

福島県域での「ペー」については、飯豊毅一氏に、詳しいご研究がある。(『方言の分布——推量表現「ペー」について』相模女子大学紀要 13, 1962)

4) 福沢武一著『信濃太郎』(柳沢書店, 1969) には、「エペ」「ヤペ」について、広域な分布が指摘されている。

5) 藤原与一先生著『方言の山野』(文化評論社出版, 1973, 67頁)に掲げられた「表現法調査要項」所収の一項に学んだものである。

成稿後、藤原与一先生にご高覧いただき、ご教示をたまわりました。記して、心から感謝申しあげます。(1977. 9. 1記)

A Dialect-Geographical Study on Dialects of Chūbu Areas in Japan (II)
— A Study on the dialect distributions of an inviting expression “Let’s go to the sea.” —

Yoshi Ebata

In this paper, I make it my chief aim to bring light on the actual conditions of the dialect distribution of the inviting expression in the Chūbu Areas in Japan and to consider the history of the distribution.

- 1) A Study on the dialect distributions of ‘ikamai’, ‘ikomai’, and ‘ikumai’ in those areas.

The results obtained are as follows;

- 1) ‘ikomai’ is newer than ‘ikamai’. — ‘ikamai’ > ‘ikomai’
- 2) ‘ikumai’ is newer than ‘ikamai’. — ‘ikamai’ > ‘ikumai’
- 3) ‘ikomai’ is newer than ‘ikumai’. — ‘ikumai’ > ‘ikomai’

However, I defer it until a more opportune time to determine ‘ikomai’ > ‘ilumai’.

- 2) A study on the dialect distributions of these inviting expressions in those areas; ‘ikazu’ ‘ikazā’ ‘ikiyashō’ ‘ikimashō’ ‘ilubē’ “ebe” ‘ika?’.

In this chapter, the dialect distributions and the history and the usage of them are described.

- 3) A Study on the inviting expressions on the Dialects of Nakasendō Area.

In Nakasendō Area from Kyōto to Tōkyo, an inviting form “~ mai” is described. As the result, expressing forms “^ˆ~ mai” are heard from “Mieji” in Gifu Prefecture to “Niekawa” in Nagano Prefecture.